



森林ふれあい情報

平成29年 1月
第 41 号

林野庁中部森林管理局
木曾森林ふれあい推進センター
〒397-0001 長野県木曾郡木曾町福島1250-7
TEL:0264(22)2122 FAX:0264(21)3151
E-mail:kiso-fureai@maff.go.jp

教職員を対象とした森林・林業体験学習会

8月4日（木）、木曾地域の教職員を対象とした「森林・林業学習会」を、長野県木曾郡上松町の赤沢自然休養林で実施しました。

この学習会は、小・中学校の教職員に森林・林業について理解を深めてもらい、森林環境教育の重要性やその知識を高めてもらうことを目的に、長野県と共催して平成14年度から実施しているもので、今回で15回目の開催となります。

今回は、温帯性針葉樹の保存・復元を図るために設定された「木曾悠久の森」について、先生方に理解を深めていただくために、赤沢自然休養林内で行いました。

始めに森林鉄道で丸山停車場まで移動し、木曾五木の説明を行い、その後、普段は一般の方が入林出来ない、木曾生物群集保護林（旧林木遺伝資源保存林）の「千本立（せんぼんだち）」、「奥千本（おくせんぼん）」を散策しながら、森林の生い立ちや歴史、「木曾悠久の森」の取組などの説明を行いました。

前日の夕立のせいか、澄み切った空気とヒンヤリとした森林の中を、軟らかい土を踏みしめての散策は、私たち職員でもなかなか味わうことの出来ない爽快なもので、参加した先生からは「身近なすばらしい自然を教職員、地域の方が理解し、後世に伝え、つなげていく大切さを、子供達にも伝えたい」、「教師が自然の中で学び、安心する心ができたとき、子供に対して多くを教えることができる」、「遠足等自然体験で来てみたい」との感想が寄せられました。

先生方の参加が年々減少傾向にありましたが、今回は木曾地域の11名の先生方に参加していただきました。アンケートでは、次回開催希望について「普段入林できない箇所へのエコツアー」を希望された方が殆どであり、これを参考により良い学習会を計画していきたいと考えています。



奥千本で説明を聞く参加者

木曾悠久の森 上松町民見学会

平成26年4月に森林生物多様性復元地域として、木曾ヒノキ、サワラ等の温帯性針葉樹林の保護と復元を図る取組を始めた「木曾悠久の森」について、上松町観光協会が地元住民の方々を対象として、この制度について学べる「木曾悠久の森上松町民見学会」を9月30日（金）に赤沢自然休養林内で開催し、当センターからも職員が講師として

参加しました。

当日は、木曾悠久の森における取組に関するセミナー（講演）と、木曾悠久の森においてコアaに区分し、温帯性針葉樹林を厳格に保存する区域となった千本立・奥千本への現地見学を行いました。

セミナーでは、中部森林管理局計画保全部流域管理指導官から「木曾悠久の森の取組について」と題し、地域の方でも馴染みのある木曾地方の歴史、木曾の森林と地域の人との関わりなどの話を交えながら、取組の目的、森林の現況、取り組むべき課題、目指すべき将来像等についての解説があり、参加者からは、「木曾悠久の森の長期間にわたる取組はわかったが、どの程度の期間を見込んでいるのか」、「赤沢における検討課題はどういったものがあるか」といった質問が多数寄せられ、この取組に対する地元の関心の高さがうかがえました。



開会式



流域管理指導官からの説明

現地見学では、歩道沿いのマルバノキや、シロモジなどの葉が彩りを添え、樹齢約300年の木曾ヒノキ等の温帯性針葉樹が立ち並ぶ千本立・奥千本までのコースを森林の現況等について説明を行いました。

今回、平日であり地元での各種行事が重なり参加者は14名と少なめでしたが、見学を終えて参加者からは「いつ来ても木曾ヒノキの森は素晴らしい」「こうした見学会をまた計画してほしい」といった感想や意見があり、今後も関係団体等と連携して、多くの方に木曾悠久の森が広く認識していただける機会を作っていきたいと考えています。

森林ボランティア・NPO連携推進会議

10月14日（金）～15日（土）の2日間、長野県諏訪郡下諏訪町において「森林ボランティア・NPO連携推進会議」を開催しました。

この会議は、中部森林管理局管内で活動する森林ボランティア団体やNPO法人との交流促進及び情報交換や相互研鑽を行うことで、ボランティア団体等の更なる資質の向上を図るとともに、広く一般の皆さんに対し国民参加の森林づくりへの理解や、森林環境教育の重要性をPRすることを目的に開催したもので、10団体と局署職員併せて55名が参加しました。

1日目は、参加団体の見識を広げるため、南信森林管理署管内の東俣国有林内にある国指定遺跡の「星ヶ塔黒曜石原産地遺跡」において、



館長から遺跡の説明



丸太切りに挑戦

下諏訪町立諏訪湖博物館長の宮坂清氏から、発掘の苦労話や縄文時代の黒曜石発掘・運搬の方法等をわかりやすくユーモアあふれる説明に聞き入り、なかなか見れない場所に興味津々でした。

その後、南信森林管理署職員から「ニホンジカの食害対策の取組」についてにした説明や、くくりワナ設置の方法の実演に参加者は聞き入っていました。

2日目は、「森林（もり）は友だち、森に入ろう」をテーマに、「森・ふれあいフェスタ」を開催し、爽やかな秋晴れの下、大勢の親子連れが会場に訪れ、木製のパーツを組み立てるミニ

ニス作りや、竹とんぼ作り、木工細工や、土からできた不思議な絵の具を使ったドブアートや、青竹を使ったパン作りなど、10のブースで様々な体験を楽しんでいました。

また、下諏訪町のゆるキャラ「やしまる」と「万治くん」の登場もあり、「楽しかった」「また参加したい」との声が聞かれ、延べ千名の参加者に木や自然素材の数々と触れ合ってもらえる機会をつくることができました。

参加した局署の職員も、様々なNPO団体等と接する機会となり、2日間を通して充実した連携・交流の場となりました。

木曾の国有林見学会（秋季）

10月27日（木）、赤沢自然休養林において、木曾川下流域の住民を対象とした「木曾の国有林見学会2016秋季」を開催しました。

この催しは、江戸時代から深い繋がりを持つ木曾地域と名古屋の関係や、森林・林業について理解を深めていただくことを目的に、下流域の都市住民の方々を対象に行われ、木曾川源流域の国有林を訪ね、木曾地域の林業の歩みや、林業遺産、名古屋の熱田白鳥湊にたどり着くまでの運材技術の変遷等を実際に見聞きしていただく学習講座で、昨年度から開催し、本年度も春に続き2回目の開催となり、ロコミ等により名古屋市民から好評となり、今回は10名がキャンセル待ちといった状況の中、実施しました。

当日は快晴に恵まれ、名古屋市内を中心に参加された49名とスタッフ2名の51名が中部森林管理局名古屋事務所「熱田白鳥の歴史館」を出発し、赤沢自然休養林到着後は、中部森林管理局次長をはじめガイド等を行う国有林職員8名により現地案内を実施しました。

参加者はこの見学会に先立ち、10月18日に、名古屋の木材産業と森林・林業の歴史や、国産材を使うことの意義、上流域の森林（国有林）と下流域の名古屋市の結びつきなどを事前に名古屋事務所において学習しました。



中部森林管理局次長からの歓迎の挨拶

紅葉の時期には少し遅れたものの秋空の暖

かな日差しの下、中部森林管理局次長の歓迎挨拶の後、昼食をとり、森林鉄道で木曾ヒノキの森林と溪流が織りなす景色を眺めながら終点の「丸山渡停車場」に移動し、職員のガイドにより、歴史とともに育まれてきた樹齢300年余りの木曾ヒノキやサワラが生い茂る林内を散策し、木曾の林業の歴史や運材方法、伊勢神宮との関わり、木曾五木の樹種の見分け方や特徴などを学びました。

参加者からは「楽しかった」「森林鉄道が素晴らしかった」「この森林がいつまでも存続することを願う」との感想や「できれば希望者全員が参加できるように」「季節毎に催せないか」といった要望が聞かれました。

なお、この催しは、木曾復興支援の取り組みとしても位置づけており、王滝村のお弁当と郷土の食材である「シイタケ」や「すんき」を使ったカレー、野沢菜入りの「おやき」などがお土産として、参加費用の中に地元特産品等の購入代として含まれています。

今後も実施にあたり参加者の意見・要望をとらえ、より意義のある催しとなるよう努めていきたいと考えています。



熱心に説明を聞く参加者

木曾駒ヶ岳の植生復元事業

中央アルプス駒ヶ岳（標高2,956m）の頂上周辺では、登山者の踏み荒らしや、大量の降雨、降雪、強風による砂礫の移動等により貴重な高山植物の衰退が懸念されることから、当センターでは関係機関・団体等と連携して植生の衰退防止と復元を図ることを目的に平成17年度から植生マットの敷設作業を開始し、平成26年度までにマットの補修（敷き直し）を含めて延べ1,967㎡を実行してきました。

植生マットの敷設とともに高山植物保護の看板を設置したことから、登山者による踏み荒らしの回避、表土の流出防止、砂礫の移動を最小限に抑える等の効果があり、駒ヶ岳の植生が徐々にではありますが着実に復元してきています。

今年度はボランティア及び関係者らと7月20日、9月9日に実施しました。

7月20日は、荒天のため27年度未実施となっていた箇所について、補修作業を主体に150㎡を12名の参加者で行い、当日は「山の日制定記念国有林ゴミゼロ運動」を兼ねて、過去に敷設した箇所での固定ピンの回収と周辺でのゴミ拾いも併せて実施しました。

9月9日は、参加者30名によりロープウェイ山頂駅から現地までの資材運搬と植生マット敷設作業（106㎡）に加え、水流による地表面の洗掘と植生の流出を防ぐため、



7月20日の補修作業



植生マット敷直し前の耕起作業

付近に点在する大小の礫類を敷き詰めた「石組みダム」の設置と、7月に敷設した植生マットを一旦外し、表層の細粒土を手鋤により耕し、礫を表面に出した状態で再度マットを被せ種子の定着を促す「耕起（こうき）」作業を新たに取り入れ、植生回復の効果をより高める試みを行いました。高山帯で鋤を使用する作業に初めは戸惑いもありましたが、調査機関の指導の下、予定していた作業量を参加者の協力により無事に終えることができました。

今後は、植生回復の経過観察を行いつつ、必要な箇所への補修作業を中心に、高山帯における植生復元事業に取り組んでいきたいと考えています。

林業体験技術指導

みどりの少年団

木曾地域のみどりの少年団が一堂に会し、緑豊かな自然の中で互いに交流し、共同作業や森林・林業その他自然に関する学習活動を通じて相互の連携を深め、緑豊かな心を育むことを目的とした木曾地区みどりの少年団交流集会在、8月2日（火）に長野県木曾地方事務所の主催で開催され、当センターも技術指導のために参加しました。

当交流会は木曾地域の町村で毎年実施されており、今年は木祖村「こだまの森」を会場に11の少年団、引率教員、主催者、指導者等含めて約140名が参加しました。

各みどりの少年団による活動発表の後、各グループに分かれ自己紹介のあと、へらの形に切り抜いた板をサンドペーパーで研ぎ、料理に使うへら作りを行いました。

午後から木や山に関するフィールドビンゴを行う予定でしたが、あいにく午後から雷雨が心配されることからフィールドビンゴは中止となりましたが、子供達の間では良い交流の場となりました。



木製へらを作る団員

阿久比高校

8月9日（火）愛知県立阿久比高等学校の生徒40名と教師5名により、長野県西部地震復旧跡地に生育するハンノキ等の除間伐作業を行いました。阿久比高校では生徒たちが以前から阿久比町内外でボランティア活動を実施しており、今回の除伐作業は今年で20回目になります。

当日は、木曾森林管理署の職員から長野県西部地震の概要及び復旧の経過の説明を受

けた後、作業地へ移動し当センター及び、木曾署職員の指導の下6班に分かれて、慣れないながらも手ノコを使い、次々と除伐、玉切り作業にかかりました。初めて参加する生徒や2回目となる生徒もおりましたが作業を進めるに従い作業に慣れ、生徒からは「次はこれを切ってもいい？」などの声が聞かれました。

けがも無く作業は終了し、このボランティア作業を通じて、森林の大切さなどを理解したと思います。



除伐木を玉切る生徒

地球緑化センター

9月10日（土）～11日（日）NPO法人「地球緑化センター」では、日本各地での森林を守り育てる活動を推進するため、「山と緑の協力隊」による除間伐作業を行いました。

今回は、大学での夏休みを利用して初めて参加した学生をはじめ、26名の参加者が4班に分かれ、小川入国有林内の24年生のヒノキ人工林で、作業を行い、当センター及び木曾森林管理署職員と伐倒方法の手順、かかり木処理の仕方などの安全指導にあたり、作業を無事終了しました。

その後、天然更新試験地を見学し、ヒノキ等の更新メカニズムや保育の大切さの説明を受けました。

天候にも恵まれ、参加者からは、「自ら森林の手入れができて良かった。」「豊かな自然の中良い汗がかけました」「木曾ヒノキになるには長い年月がかかることが実感できました」といった感想が寄せられました。



参加者による間伐作業

みよし市友好の森整備

9月17日（土）黒沢御岳国有林と隣接する木曾町三岳地区内に、愛知県みよし市が水源涵養林として保有している森林の除間伐作業を行いました。

これは、みよし市民が作業を通して森林保護や環境保全等の啓発活動や上下流域の交流を行うものであり、28名（内小中学生14名）が5班に別れ、作業現地まで森林散策を行い、当センター及び木曾森林管理署や木曾地方事務所等の職員から伐倒方法等の指導を受けた後、2～3人で間伐作業を行いました。

参加した人たちの中には、伐採した木をコースター等にして持ち帰る人もおり、「将来のため森林整備は必要」「普段できないことができた」との意見があり好評でした。



職員による作業指導